

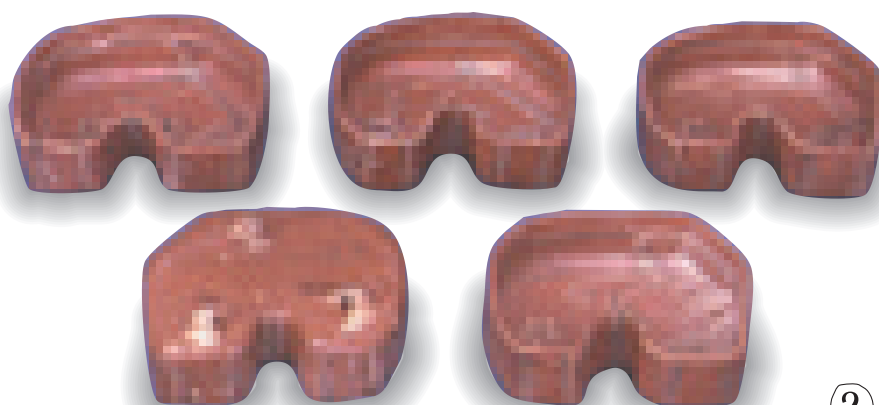
石川県七尾美術館だより

平成19年1月1日発行
編集・発行 石川県七尾美術館

第48号(冬号)



①



②



③



④

「春の名品展 ～池田コレクション・ 茶道具に親しむ～」より

- ①「志野草花文足付香合」 桃山時代
- ②「織部草花文向附」 江戸時代
- ③「美濃伊賀水指」 桃山時代
- ④「黒唐津沓形茶碗」 桃山時代

全て当館蔵（池田コレクション）

ISHIKAWA
NANAO
ART MUSEUM



展覧会紹介

平成19年1月5日(金) ~ 3月31日(土)

休館日については裏表紙をご覧ください

「冬季・館蔵品展」

開催中 1月28日(日)

◆ 第二展示室

「日本の冬景色・室町から昭和まで」

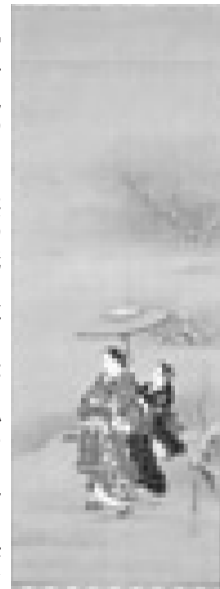
日本は四季を持つ国です。いにしえから春夏秋冬を感じ、生活してきました。四季折々の風物や動植物を愛しみ楽しむ方法を知っています。

「冬」は、新しく生み出す力を蓄える季節です。厳寒期にも、先人たちは冬の自然の中に、優しい太陽の光や降り積もる白雪を愛で、生命力をみなぎらせる動植物を貴び、そこに「美」を見出してきました。

雪は古来より豊年の瑞兆であり、雪の白は神の色とされてきました。このように、作品の画題や形に吉祥の意味を持たせることが多々あります。吉祥紋は祥瑞紋ともいい、『おめでたい』意匠です。鳳凰や龍のように単独で用いられるものもあれば、梅に鶯、松・竹・梅(三友)など、二種類以上の組合せで用いられるもの、また、吉祥文字として用いられる、万字・喜字・寿字などがあります。

本テーマでは当館所蔵品の中核をなす「池田コレクシオン」および寄託作品より、冬を楽しむ作品に加え、新年の吉祥文様などをあわせて、典籍、絵画や工芸など二十二点を紹介します。

● 「雪中美人図」 宮川長春 (一六八二~一七五二)



雪景色の中、供の禿に傘を差しかけさせて歩む遊女の華やかさとは対称的に、周りの景色は静寂そのものであり、それが遊女の美しさをより際立たせています。

● 「暮雪図」 川合玉堂 (一八七三~一九五七)



画面の大部分は白い雪に覆われ、水辺に建つ小屋の屋根にも厚く雪が降り積もっています。静寂の中に、ゆつくりと進む一艘の小舟の水音だけが聞こえるようです。

● 「不白茶碗 銘千鶴万亀」

川上白 (一七二七~一八〇九)

「鶴は千年、亀は万年」とあるように共に福寿を意味します。亀茶碗は碗形でつやのある黒釉が施され、一部を掻き落として緑釉を入れ、匚で亀を描き、鶴茶碗は筒形で青磁釉が施され、飛翔する鶴の姿が表わされています。



◆ 第二展示室

「いろいろな形を楽しむ」

彫刻や工芸作品には色々な形があります。また、絵画の中にも様々な形が描かれています。それらは、時には写實的にその物を写し取り、時には作者のイメージによって抽象的に表現され、観る側を楽しませてくれます。

今回は所蔵作品と一部寄託作品から、工芸・絵画・彫刻作品の「形」に焦点を当て、二十六点を紹介します。

現在観ても新鮮で独創的な桃山から江戸時代の織部焼、現代作家たちが描き、作り出した抽象・具象のいろいろな形をお楽しみください。

また会期中、能登国七尾出身で、桃山時代に活躍した長谷川信春(等伯)が二十歳代後半頃に描いた「善女龍王図」を特別展示します。

《織部焼》

「織部」の名称は桃山時代に活躍した茶人・古田織部(一五四四~一六一五)にちなんで名付けられたとされます。桃山時代から江戸時代初期頃を全盛期として美濃地方(現在の岐阜県)で焼かれ、茶碗・向附・鉢・徳利など多種多様な器が制作されました。銅緑釉の鮮やかな緑、歪みや型打ち技法による斬新な形状、桃山文化を反映した自由自在な文様を特色としています。その色・形・技法などから「黒織部」「青織部」「総織部」「鳴海織部」などの種類が知られています。

そんな魅力的な織部の中から、今回は南蛮人をモチーフにしたユニークな燭台、大きく歪んだ姿が靴(沓)に似ていることから名付けられた沓形茶碗、最も変化に富む向附の、アワビを形取った逸品などを紹介します。

「春の名品展」

「池田コレクション・茶道具に親しむ」

2月10日(土)～4月22日(日)

◆ 第二展示室

安土桃山時代に千利休（一五二二～九一）によって大成された「茶の湯」は、以後約四〇〇年以上にわたって受け継がれ、現在も多くの人々に親しまれています。

その間、時代や人々の求めに応じる形で様々な流派が誕生し、各流派では時には伝統を遵守、またある時には時勢に合わせて形を変えながら、代々家風を伝えてきました。

また、「茶の湯」に関わる宗匠や数寄者たちなど多くの人々は、古来の名物道具を数多く見出し、蒐集、またそれぞれの好みを反映した様々な茶道具を制作し、茶席で披露すると共に、大切に所蔵してきました。

その道具の一点一点には制作者やそれを受け継いだ歴代の所持者など、関わった人々の様々な思いが込められています。

当館所蔵品の中核である「池田コレクション」の様々な茶道具にも、蒐集者である池田文夫氏（一九〇七～八七）の一方ならぬ深い愛着を感じる事ができます。

本展は恒例になりました春の茶道具展示です。「池田コレクション」より、様々な茶道美術品を紹介します。

黄瀬戸六角盃（きせとろっかくさかずき）

桃山時代（十六～十七世紀）制作

黄瀬戸は桃山時代に美濃国（現在の岐阜県美濃地方）で制作された「美濃焼」の一種で、美濃において桃山茶陶が焼かれる出発点となった焼物です。

当時、「茶の湯」の流行から茶道具に対する需要が高まり、国内の多くの窯で茶人の好みに応じた様々な茶陶が制作されました。

本作品は十客の盃で、この手の器種は「ぐい呑み手」とも呼ばれ、薄く鮮やかな黄釉とシンプル且つ端正な造形という黄瀬戸の特徴をよく備えています。

全体的に薄作りで轆轤の後、側面を平らにして六角形に整えて成形され、器全体に透明性のある朽葉色の黄釉が掛けられています。

十客全てが揃っており、しかも何れも無傷なのは他には殆ど類例が無く、大変貴重な作品です。



《現代作家作品》

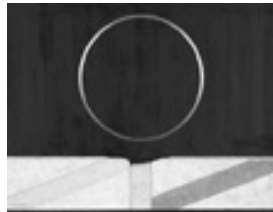
- 工芸… 番浦省吾・百貫俊夫
- 絵画… 勝本富士雄・白尾勇次・前田さなみ
野中未知子・中村静男・土田佳代子
- 彫刻… 田中太郎・岩山豊郁・末政哲夫
松栄清彦・板坂葵・吉田隆



「織部寄向附」(池田コレクション)



「海から来た神」松栄清彦



「もう一つの風景」白尾勇次



「岩場の幻想」百貫俊夫

◇ 観覧料

	一般	個人	団体
大高生	280円	350円	220円

※中学生以下無料・団体は20名以上です。



「竹茶杓 追銘下ソギ」
古田織部

◇ 観覧料

	一般	個人	団体
大高生	280円	350円	220円

※中学生以下無料・団体は20名以上です。
※観覧料は同時開催の「ポスターで楽しむ、ジャズの世界展」と共通料金です。

「ポスターで楽しむ、 ジャズの世界展」

2月10日(土)～4月22日(日)

◆ 第二展示室



「Joe Gordon」1963年

七尾市の姉妹都市であるアメリカ・モントレイ市は世界三大ジャズフェスティバルの一つである「モントレイ・ジャズ・フェスティバル」(MJF)の開催地として有名です。

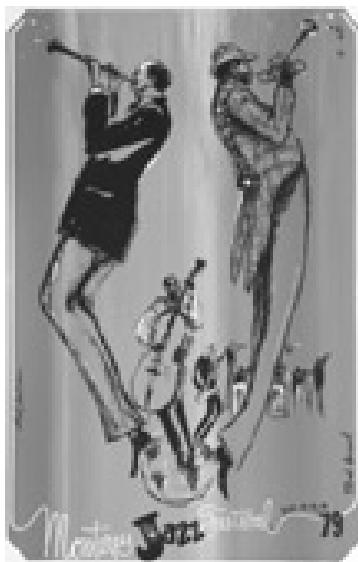
そのモントレイ市から、平成八年にジャズを通して育んだ友好の記念として、MJFポスター五十枚を七尾市・和倉温泉観光協会・和倉温泉旅館協同組合にご寄贈いただきました。

この躍動感溢れるポスターは、アメリカの作家EARL NEWMAN氏が一九六三年から九五五年までの間にリトグラフの技法を用いて制作したもので、その初刷りが、アメリカの首都ワシントンにあるスミソニアン博物館に収められているという大変貴重なものです。

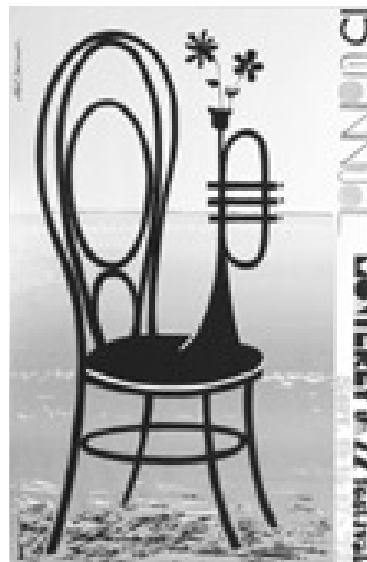
また、今回この展示にあわせ展示室内でBGMとして使用させていただく為に、皆様よりジャズのCDを広く募集いたします。『おすすめの一枚』や『自慢の一枚』をお借りし、観覧者の方々に



「Jazz Greats」1992年



「Woody Herman, Diz」1979年



「Monterey Chair, Horn」1972年

『観て』『聞いて』『楽しんで』いただける展覧会になればとの企画です。

お貸しいただける方は当館までご連絡ください。

アートホール催し物案内

アテフ・ハリム ヴァイオリンリサイタル

2月17日(土) 開演 午後6時30分

フランス国立管弦楽団コンサートマスターを務めた後、ソリストとして活躍のアテフ・ハリムによる愛と情熱あふれるヴァイオリンの世界をどうぞお楽しみ下さい。共演…加藤徹(ピアノ)

入場料【前売料金】 当日券はいずれも500円増

一般3,000円 大学生以下1,500円

主催 A & A art (イーアンドエーアート)

連絡先 同右 ☎03(3392)2955

森 ☎080(1906)8977

ひまわり保育園 おたのしみ会

2月24日(土) 開演 午前9時00分

三歳児から五歳児による発表会で、楽器演奏や歌、遊戯や劇あそび等を予定しています。初めてのアートホールでの発表となります。子ども達の一年間の成長をご覧いただきたいと思います。

入場料 無料

主催 ひまわり保育園

連絡先 同右 ☎0767(57)2800

国際ソロプチミスト20周年記念事業チャリティコンサート “心に響くカンツォーネ”

3月3日(土) 開演 午後1時30分

認証20周年を記念してカンツォーネコンサートをお届けします。出演は2003年東京に於ける太陽カンツォーネコンクールクラシック部門最高位受賞の横山博保氏です。益金はミナクル中央図書館の「ソロプチミスト文庫」へ寄贈致します。

入場料 2,000円

主催 国際ソロプチミスト能登

連絡先 神野錦子 ☎0767(53)7771

岡本太郎展 特別講演会報告

「岡本太郎の仕事と人となり」

講師 村田慶之輔氏（川崎市岡本太郎美術館館長）

（最初にビデオ鑑賞）

岡本太郎は生きていた間ほとんど評価されませんでした。やっかみ半分「下手くそ」とかいわれた。一般に人の常識とされるもの、現状、体制といったものに対していつも「NO」と突きつけ、挑んだのでね。でも、太郎は単なる絵描きではなかったんです。「職業は人間です」というくらい色々なことをやったことで、生意気だというふうに見られたんですね。

太郎を私は一種の思想の装置だと思う。単なる思想家とはいわない。思想家は物事を体系的にまとめますが、太郎は体系というのが大嫌いでした。もう頭の中には世界中の美術、造形が入っているんです。それは誇張ではなくて、実際に「わが世界美術史」（現、『美の呪力』新潮文庫）というユニークな本を書いています。太郎はフランス語でものを考えていましたから、非常に論理的に、しかも熱く書いています。だから、訴える力が強い。今、生前の太郎を知らない人たちが、みんな太郎を支持してくれている。

岡本太郎の五〇年来の分身のような秘書であり、養女であつた敏子さんは、十年前に太郎が亡くなったから猛然と戦い始めたんです。だから敏子さんが復刊したり編集したり書き下ろしたりしたことで、太郎関係の本は全部で八〇冊程あります。今これだけのブームになったのは、敏子さんに負うところが非常に大きいんです。

一九二九年に東京美術学校に入った十八歳の時、すぐに辞めて両親とヨーロッパに発ち、両親は二年程で帰ってきましたが、太郎はパリに残って十年ちよつといました。その間、太郎が付き合った日本の美術家というのはほとんどいません。フランスの美術家、モンドリアン、エルンスト、カン

ディンスキーなどのグループで、最年少で唯一の東洋人として活動しました。

そのうち、パリ大学で哲学や社会学、文化人類学も学びます。とくに文化人類学というのは、白人以外の地域の人たちの宗教や生活全般を対象として、それぞれの地域で価値のある文化を形成しているんだという革新的な学問です。太郎はそれで、「僕はやっぱりアジアの人間である」ということを自覚する。この自覚が大事なんです。そういう自覚が深まると、帰ってきてても日本人として目覚めた活動をする訳です。他の文化との比較も出来る。そうした時に、さっきの迫力のある世界美術史というのが出来るんですね。

太郎は五〇年も前にこういいました。「芸術はきれいであつてはいけない、心地よくあつてはならない」。当時はおおかた「何をいっているのか」と。絵っていうのは綺麗なものの、癒しだと思われていますが、太郎のこの絵を見ていても誰が癒されますか。むしろ「エネルギーが与えられた」とか「挑発された」とか、そういう感想がいつぱいあるんですよ。太郎は絵を描こうと、彫刻をしよう、あるいは文章を書こうと、いのちをひらいているんです。

一九七〇年、大阪万博のために世界中を飛び回った。何故、太郎が呼ばれたかという、《太陽の塔》は中がすごいんです。あの中に未来と過去と現在の、世界中の色んなものを表現し、飾ったんです。あの塔の彫刻も、太郎じゃないと出来なかつたに違いはないけれど、世界中から民族的な遺産を集める力、それがあるから一美術家なのに万博のテーマプロデューサーに選ばれたんです。「人類の進歩と調和」というのがテーマだったんですが、太郎は「人類に進歩も調和もない」と。現在エネルギーギッシュに生きるのが人間なんで、反対だったんですよ。だから思いきり「ペラボール」一塔を作ったんです。

今《明日の神話》というのがテレビを賑わしていますね。これは横三十メートルの大壁画で、一九六八年にメキシコでオリンピックが開かれるん

でホテルを造ろうと、そのホテルのロビーに掛けるためのものでした。万博の仕事を引き受けたその直後なんです。普通だったら、メキシコに行くと巨大壁画を造るなんて考えられない。ところが太郎の生き方というのは、楽な道と困難な道があると、困難な道を選ぶ。その時も実践し引き受けたんですが、出来る前にホテルが倒産し行方不明になっていたこの壁画が、何年か前に発見され、日本に運ばれ修復されて、八月いっぱい一般公開しています。

太郎はフランスから帰って来た翌々年、兵隊に引っぱられます。中国に送られて、一日に何十里も無駄に歩かされ、毎晩殴られた。命令で司令官を描いています。太郎は上手いんですよ。でも、絵は生きてない。仲間の兵士のデッサンは、本当に生き生きしてるんです。太郎は戦争というものに、ものすごい反感、憎しみを持っていました。パリから帰る一年前に、お母さんのかの子は亡くなっています。岡本太郎が編集した「一平かの子」と「母の手紙」（共にチクマ秀版社）という本がある。これは今の母親、父親に是非読ませたい。これだけの愛情って、今はもう無いでしょう。愛情つたってベタベタした愛情じゃないですよ。批判し合っていますよ。

かの子は歌人で出発して、小説は死ぬまでの三年間くらい書いて、川端康成らに認められて一途に燃えた。太郎がその血を受けていることは間違いないですね。一九三九年、「私はパリで父からの電報を受け取った。かの子病氣、回復の見込み。私は身も心も動転してしまつた。あの思慮深く周到を極めた父が、こんな曖昧な知らせ方をするはずがない。ただならぬ事が起こつたんだ。続いて正確に一日ずつおいて、かの子危篤」。また次の一日置いて、かの子安らかに眠る。気を落とすな。後文。打ちのめされたように、数日床に就く。私は父のことを思った。こという、唯一の生き甲斐を失つた親父は、どんなに惨めだろう。ところで、最後の電文は私を労わって、僕は君のために生きる。健やかにあれ。苦しければ電打てといつてき

た。私は返電した。母は我が内に生きつつあれば、悲しからず。父は僕に煩わされず、仕事に生きよ。こういう文が、二冊の本にはいっぱいあるんです。

まあ、この本を見れば本当にかの子の太郎に対する愛情をひしひしと感じます。それから、一平が太郎の気持ちを気遣いながら電報を打ったのでしよう。こういう親子なんですよ。子どもの内から大人と対等に、親が話しや相談をかけたります。太郎は早熟な育ちで、とにかく芸術、芸術で育っているから、身体の内面に沁み透っている訳です。だから「芸術は人生だ」とか、「芸術は呪術だ」「爆発だ」と、さかんにいうんです。

かの子の実家は川崎の多摩川のほとり、江戸時代からの大地主です。別荘のある青山で生まれ、名門跡見女学校を出る。まったくのお嬢さん育ち。兄さんに一高、東大を出て早死した晶川というのがいて、純文学をやって小説を書いたりした。同級生に谷崎潤一郎がいて、かの子の実家に来るんです。それを見ているから、かの子は純文学に憧れ、というよりも芸術一筋なんです。

やがて一平と出会う。一平は江戸の京橋住いで洒脱だし、東京美校生で美男子なんです。結婚して太郎がすぐにできて、青山に三人で生活する。でも、美校を出たってほとんど仕事もないし、朝日新聞の漫画家の口があるというんで、そこに就職するんです。

一平の漫画は、ものすごく当たってお金がどんどん入る。そうなると、遊びの虫が出てくるんです。すると、半ば精神衰弱のかの子は必死に机に向かつて書き物をしたり、太郎を抱いて、うわ言のようにいつている。「今に二人でパリに行きましょうね。シャンゼリゼで馬車に乗りましょうね」その姿を一平が見てね、改心するんですよ。その改心の仕方が、並じやないんです。かの子は一平を思っ気持ち、美談をいっぱい書いています。ところが、漫画家になった旦那のことを、「私はもう、人間とも思えません。とても人はいい旦那なんだけど、とにかくそのことに關しては、将来の見込みはありません。芸術に關しては」と、そ

んなことをいつています。今でこそ漫画つてのは芸術なんですよ。けれどもね。元々一平は、かの子を観音様と見立てていたんで、その後本当に尽くすんです。ただし、夫婦関係は断つということ。今度は、かの子が学生と相思相愛になる。一平はそれを許すというか、家に入れるんです。かの子が死んで日も経たない内に、一平は結婚しちゃうんです。あつという間に三人子どもが生まれますが、戦後間もなく岐阜の美濃大田で死ぬでしょ。すると、葬式のあとで残された義母や義弟妹の生活を頼まれて、太郎は自分も喰うや喰わずの中を、なんとか東京で家を建てて面倒を見ました。

それから、パリで描いた絵とか沢山の本とかは、青山に残して兵隊に行つていた間に、空襲で全部燃えちゃったんです。だから一番大事な人間形成期の二十代の資料が無いんです。太郎の場合は、向こうの人間みたいに生きてきた。それも、多面的に。そのところが詳しく分からない。推測でいうしかないですね。

非常に華やかに見える裏側に、そういう太郎の愛、苦しみがあつたんですね。で、一九九六年に亡くなったんですが、亡くなる前年の本「一平かの子」のはじめに「年が変わり、一九九六年の二月二十六日になると、私は八十五歳だ。考えてみれば、父より二十年以上、母より三十五年も居長く生きていくことになる。あの父母よりも年寄りだなんて、こんなこと想像もしなかった」「私はあれほど純粹に命いっぱい生きてきた人間は他に知らない、二人共。私はそういう人間と共に生きたことを誇りに思う」とあります。

太郎って、人間いっぱい生きてたという感じがします、親子共々。
いちど暇が有り余つた時は、岡本太郎美術館へ太郎一家に会いに来て下さい。

(本文は平成十八年八月二十日に行われた「岡本太郎展」特別講演会の内容を、当館の責任においてまとめたものです)

ポロニーヤ展ワークショップ報告

今年も大盛況のうちにポロニーヤ展が終了しました。会期中は子どもワークショップ「かんたん絵本を作ろうよ!」や銅版画ワークショップ「銅版画でメリクリスマス!」を開催しました。毎年、多くのリピーターが楽しみにしている絵本作りは、もともと文庫・もともとこの会の皆さんの協力のもと七回実施し、子ども八十七名と保護者四十六名の計一三三名の参加がありました。懐かしそうに小さな学習机に腰掛け、親子で制作される姿が印象的でした。

また、十一月十九日(日)午前と午後の二回、今年のポロニーヤ展入選者の銅版画家 釣谷さん、広瀬さん、荒川さんが講師となり、小学生から大人まで二十三名の参加者が、銅版画の技法の一つ、ドライポイントでクリスマスカードを作りました。初めて銅版画にチャレンジする方も多く、初めて見たり聞いたりするニードルやルーレット、ムーレットなどの道具を駆使し、線刻などによる表現を相談しながら、作業は楽しく進みました。講師の先生方、参加者のみなさん、ありがとうございました。



第8回 石川県七尾美術館 友の会鑑賞の旅を終えて

今回の『友の会鑑賞の旅』は、今夏当館で開催した「岡本太郎展」芸術に挑んだ親子・かの子、一平、太郎。にちなみ、大阪は万博記念公園にある『太陽の塔』の見学と大阪市立美術館の『ブラド美術館展―スペインの誇り巨匠たちの殿堂―』を鑑賞してきました。

九月二十四日、まだ夜も明けきらぬ午前五時に七尾美術館の駐車場を出発。車中、岡本太郎の「人」と「作品」に関するビデオと『ブラド美術館』のある「スペイン」を案内するビデオを上映、同行の当館学芸員からの解説もあり、見学先への期待が膨らみます。

連休の日曜とあつて、大阪・天王寺公園は家族連れでにぎわっていました。人々と花壇で華やいだ雰囲気の中を走り、「大阪市立美術館」に到着。同館の守屋学芸課長代理に「ブラド美術館展」の見所などを解説していただいた後に自由観覧、世界に名だたる美術品の数々を鑑賞しました。名品・名作が放つパワーもさることながら、観覧者の多さにも圧倒されました。

昼食は、ゆったりとした空間に、陽光がふりそそぐホテルのラウンジでランチバイキング。残念なことに時間に押され、慌しいランチタイムとなつてしまい恐縮でした。バスは郊外へ向かい、いよいよ『太陽の塔』の塔内見学ツアーに参加。タイムトンネルのような地下通路を通って目の前に広がる空間はまさに「EXPO'70」ワールド！当時、

色鮮やかであつたであろう造作物（ミニメントなど）は、うつすらとほこりをかぶつており三十六年間という時の流れを感じさせます。塔内部では万博開



万博記念公園「太陽の塔」前で

催時の記録DVDや『太陽の塔』が屋根からつき出た「テーマ館」の模型等も見て、参加者から「なつかしい」「すごかったんやねえ！」という声もあがりました。エネルギーシユな高度成長期の中で行われた「万博」そして、当時代の寵児であつた「岡本太郎」が、未だに人びとを魅了し続ける理由がわかるような気がしました。

参加者皆様のご協力のもと、『最高の芸術』にふれる楽しい旅となりました。ありがとうございました。

平成19年度

石川県七尾美術館友の会会員募集のご案内

新年度友の会会員を次の要領で募集いたします。現在会員の方で更新をご希望される方は改めてお申込み下さい。（お申込みのない場合はそのまま退会となりますのでご注意ください）

★入会手続きについて★

（1）受付開始 3月1日（木）から

（2）年度会費 1,000円

（3）受付場所 当館受付カウンターまたは郵便受付（郵便振替用紙をご利用ください）

郵便振替口座 0071010150795

加入者名 石川県七尾美術館 友の会

郵便局備え付けの振替用紙の通信欄に必要事項（会員の区別（更新・新規・元会員）・郵便番号・住所・電話番号・氏名・生年月日）をご記入のうえ、会費を添えて、もよりの郵便局窓口へお出し下さい。払込料金1000円は申込者負担となります。

★入会するとこんな特典があります！★

当館主催展覧会の観覧料が割引になります。情報満載「美術館だより」が郵送されます。特別企画展開会式・内覧会へご招待。（無料）販売グッズが割引になります。（一部除く）ほかにも友の会会員限定の特典があります♪

能登演劇堂の『五重塔』公演情報

「大工となつて生きる」以上は、一度でよい、死んでも名の残る立派な仕事がしたい」



職人の意地と生き様、友情と信頼を描いて全国で絶賛された幸田露伴原作の舞台が、前進座創立七十五周年記念公演として、縁深い能登演劇堂のみの限定公演

京都南座と能登演劇堂のみの限定公演

開演時間 1月26日（金）18：30

27日（土）13：30 / 18：30

28日（日）13：30

入場料 A席6,500円

B席5,500円

問い合わせ 0767（66）2323

石川県能登島ガラス美術館の展覧会情報

能登島ガラスコレクションテーマ展

「見てみよう！ガラスのなかを・・・」

収蔵品から、ガラスのかたまりの中に何かを埋め込むことで楽しい思い出などを表現したユニークな作品をご紹介します。



「25の記憶」秋友伸隆 1999年

その他に、ピカソやジャン・コクトー、ダリがデザインしたガラスのオブジェも必見！

会期 1月20日（土）～4月16日（月）

休館日 2月20日（火）・3月20日（火）

開館時間 9：00～16：30（入館は30分前までに）

体験 1月20日（土）・21日（日）ペーパーエイト

2月10日（土）・11日（日）ガラス彫刻

3月24日（土）・25日（日）ガラスモザイク

問い合わせ 0767（84）1175



平成19年度 春の特別展予定

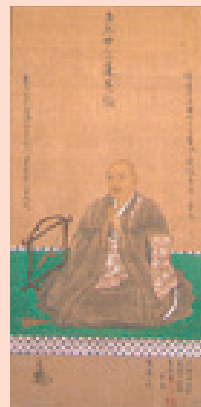


「長谷川等伯展～最晩年作品を中心に～」(仮称)

平成19年4月28日(土)～5月27日(日) 会期中無休

長谷川等伯(1539～1610)は能登七尾出身で、桃山時代に活躍した日本を代表する画家の1人として著名です。能登の美術を語る上では欠かせない存在であり、当館では等伯を重要なテーマとして平成8年から毎年「長谷川等伯展」を開催し、これまで数々の名作を紹介してきました。

さて、12回目の開催となる今回は、等伯最晩年にあたる60～70歳代に制作された作品に焦点を当てました。「妙法尼像」や「日通上人像」(共に京都市・本法寺蔵)、「商山四皓図襖」(京都市・天授庵蔵)など重要文化財3点を中心に、等伯が信春と名乗った若年時代に制作された着色画、水墨画の他、長谷川等伯一門である「長谷川派」の作品なども併せて紹介する予定です。



重文「日通上人像」長谷川等伯筆
京都市・本法寺蔵



重文「妙法尼像」長谷川等伯筆
京都市・本法寺蔵

なお、展覧会関連イベントとして前九州国立博物館副館長で、最近等伯に関する本を執筆された宮島新一氏による特別講演会も開催予定です。
本展覧会の詳しい情報については、今後順次お知らせしていきますので楽しみに！



重文「商山四皓図襖」(八面内四面) 長谷川等伯筆 京都市・天授庵蔵

平成19年度 市民ギャラリー&アートホールの利用申込みについて

七尾美術館では個展、グループ展、演奏会などの幅広い芸術活動の発表の場として、市民ギャラリーとアートホールの貸室を行っています。平成19年4月からのご利用については、1月5日(金)～28日(日)を第1次募集期間として受付します。

展覧会等の関係上、ご利用いただけない期間もありますので、詳しくは七尾美術館までお問い合わせください。【利用可能期間は当館ホームページでも確認できます】



交通案内

飛行機……能登空港より能登有料道路利用約45分
車……金沢より能登有料道路利用約1時間20分
タクシー……JR七尾駅より約5分
徒歩……JR七尾駅より約20分
市内循環バス……JR七尾駅より西回りに(まりん号) 乗車約6分
なおコミュニティバス……JR七尾駅より西コースに(くろっ7セブン) 乗車約10分

休館日のお知らせ

(1月～3月)

◆ 1月 1～4, 9, 15, 22, 29～31
 ◆ 2月 1～9, 13, 19, 26
 ◆ 3月 5, 12, 19, 22, 26

◎次号・第49号(春号)は4月1日発行予定です。